

翻訳への思い

李 愛 淑

一年間の国際日本文化研究センターでの滞在から戻ってまもない、六月一五日に韓国ของマスコミは一齐に次のような見出しの記事を発信し、大々的に報道した。

『菜食主義者』翻訳者、韓国のノーベル賞への執着に戸惑いを感じる』

これは、二〇一六年度マン・ブッカー賞国際部門 (Man Booker International Prize 2016) の受賞作である『ザ・ベジタリアン (The Vegetarian 原作タイトルは菜食主義者)』の翻訳者がマン・ブッカー賞受賞を記念して来韓し、インタビュした時の発言である。連日話題になった。

今年の五月、韓国の作家が初めて海外の権威ある文学賞、マン・ブッカー賞国際部門を受賞したことで韓国社会はお祭り騒ぎだったそうだが、どうしてノーベル文学賞のことへと翻訳者の話は飛躍したのだろうか。

その背景には韓国社会のノーベル文学賞受賞への宿願がある。毎年一〇月、ノーベル文学賞発表の時期になると、韓国社会は過度な関心を寄せては、〈今年こそは〉の期待と〈今年もまた〉の失望を反復していた。だからこそ、イギリスのマン・ブッカー賞がノーベル文学賞やフ

ランスのコンクール文学賞と共に、世界的に権威ある文学賞であることから、マン・ブッカー賞受賞の続きでのノーベル文学賞受賞を夢見たに違いない。だから翻訳者は、「文学賞は賞にすぎず、作家は書き、読者はその作品を楽しめばいいのです。それだけで、作家は報われるのです。」といい、韓国社会の文学賞に対する過度な意味付与を一喝したのである。マスコミも、外からの目を通して、ノーベル文学賞受賞でこそ韓国文学が認められると思う韓国社会の認識に警鐘を鳴らしたのかもしれない。

実際、ここ数年韓国文学の世界化をスローガンに、その象徴としてのノーベル文学賞受賞という具体的な目標を立てて、韓国文学翻訳院 (<http://www.kli.or.kr>) は海外での韓国文学の外国語訳を積極的に支援してきた。その政策の基底には、翻訳を韓国文学の世界化のための手段と見做す認識があった。その韓国文学翻訳院の支援をうけて『ザ・ベジタリアン』は念願の海外の文学賞を韓国に与えてくれたが、同時に、翻訳を文学賞獲得の手段として見做していた韓国社会に、賞より読者が楽しむことの大事さ、異文化間の共感の大事さを説き、われらの自省の契機を作ってくれた。

最初私は韓国社会の内密な願望をつかれ、不便であるはずの翻訳者の言葉を、大々的に報道するマスコミの変化に違和感を感じていた。翻訳や翻訳者にこれほど関心が集中し、話題になったことがあったのだろうか。たぶん、マン・ブッカー賞国際部門は英国で出版された外国文学の英訳本を対象にするがために、作家のハン・カン（韓江）と翻訳者のデボラ・スミス（Deborah Smith）が共同受賞したからであろう。『ザ・ベジタリアン』を支援した韓国文学翻訳院の翻訳支援事業の思わぬ成果、翻訳を通して、イギリスの読者が無名の韓国文学を楽しむことの意味に注目される。異文化の読者が楽しみ、共感できる、それこそ真の意味での韓国文

学の世界化ではないだろうか。ノーベル賞の呪縛から解き離れ、その意味を大事にしたい。

さらに私個人としては、『ザ・ベジタリアン』翻訳者が、三年間の韓国語学習で、異文化の読者が楽しめる翻訳を出したことに興味を感じている。『源氏物語』韓国語訳をしようと思いつながら、いつも回避してきた自分に思い至り、どうも後ろめたくもあるが、また限りなく羨ましい。私はどうして韓国では無名の『源氏物語』のことを嘆くばかりで、韓国の読者のための韓国語訳という道へ、進まなかったのだろうか。

勿論前人未踏の道ではない。すでに『源氏物語』韓国語訳はある。一九七三年（柳呈訳『源氏イヤギ上・下』乙酉文化社）、一九九九年（田溶新訳『源氏イヤギ1・3』、ナナム出版）には一応原文の韓国語訳が世に出た。そして二〇〇七年には瀬戸内寂聴訳『源氏物語』（金蘭周訳『源氏イヤギ1・10』ハングル社）、二〇〇八年には大和和紀の『あさきゆめみし』の翻訳（李キルジン訳『源氏イヤギ1・10』AKコミュニケーション）が出された。まさに四〇年来の翻訳と紹介の歴史はあるが、未だに『源氏物語』は韓国社会では知られず、無名のままである。

無名の『源氏物語』、韓国でのこの状況はいかにも不思議である。なぜなら、『源氏物語』の背景である、王朝時代は韓国の読者にはとても親近感のある時代である。たとえば、日本での韓流の一翼を担っている王朝歴史ドラマをみても、王朝時代、権力闘争、後宮での政治と恋、波乱万丈の人間の物語は韓国読者に人気のある素材である。また韓国ではここ数年間、町の人文学者の活躍のおかげで、古典文学、歴史のブームまで巻き起こっている。王朝物語に対する大衆の関心は最高潮に達している。これらの条件からしても、異国の王朝物語、『源氏物語』に対して韓国読者は違和感を感じないで、楽しめるはずだ。共感の土台は出来上がっている。

にもかかわらず、『源氏物語』は読者の手から離れ、いや大衆の手の届かない遙か向こうに位置している。韓国の読者が楽しめる『源氏物語』韓国語訳を必要としている。

またも、『源氏物語』韓国語訳を避けてきた自分ほうしるめたさを感じないではいられない。私にとって、『源氏物語』翻訳への思いはとても複雑である。かつて大学時代の私に、『源氏物語』は難攻不落のお城であった。古典語は硬い城壁で、私の入城をなかなか許してくれなかった。とうとう自分の無法さに気づき、今度は現代語訳は飛ばし、迂回の道として『源氏物語』韓国語訳を図書館で探し出した。自分に有利なところから攻めて行くのは良い戦略だろうと思いい、意気揚々と難攻不落のお城攻めの一步を踏み出した。そしてまもなく、韓国語訳も硬く、丈夫な城壁であることに気づき、期待しただけに落胆した。いや二度にわたる戦いに追いまくられ、私の意欲はくたくたになり、憂鬱のどん底にまで落ちてしまった。幸い若さのおかげであるうか、挫折から立ち直り、時間と根気を戦略として、古典語という城壁を攻め、とうとう『源氏物語』というお城にたどり着いた。しかし、それまでの苦難の道程のためだろうか、いつまでも『源氏物語』の前で立ちつくしている自分に気づく。

考えてみれば、韓国語訳から攻める戦略はなかなか良いと思うのだが、どうして失敗したのだろうか。『源氏物語』原文同様、『源氏物語』韓国語訳も難攻不落のお城だった。その当時は攻める自分の至らなさを自責したが、原因はそれだけではなさそうだ。『ザ・ベジタリアン』の翻訳者は無名の韓国文学を翻訳し、イギリスの読者が楽しめるようにしたのではないだろうか。翻訳者、翻訳の責任は免れない。今読み返しても、『源氏物語』韓国語訳は読者にやさしいものではない。語り手の存在を度外視した硬い文体、漢字同様の古い言葉遣い、『源氏物語』を熟知している翻訳者中心の翻訳姿勢が、異国の文学と始めて対面する読者を困惑させ、作品

への集中を妨げる。異国の物語、『源氏物語』と韓国読者との間隔を埋めてくれるどころか、拡大させてしまう。

たとえば、漫画という絵の力で読みやすいはずの『あさきゆめみし』の韓国語訳の場合も例外ではない。一例をあげると、桐壺更衣が次々と贈られる物の贈り手を推測する「いったいどなたが？」での「いったい」は、随所で使われている言葉である。それに該当する韓国語訳として翻訳者は、「デガンズル(대관절)」という言葉を使うのであるが、韓国の読者は「デガンズル(대관절)」を見つげるたびに、首を傾げてしまう。そして呼吸が乱れ、読みのリズムが崩れる。なぜなら、「デガンズル」は高い年齢層の言葉遣いで、思わず翻訳者の年齢が気になってしまう。いくら王朝物語とはいっても、一般的には「ドデチェ(도대체)」、漫画の口語体を考慮すれば、「デチェ(대체)」の方が王朝時代の雰囲気こそならず、分かりやすい。もし十代の読者なら、「デガンズルって何？」と、言葉の意味が分からずそこで戸惑ってしまうかもしれない。

また、高い年齢層の特徴である漢字言葉で、読者を困惑させ誤読に導くこともある。光源氏の元服後、桐壺帝は「まだ年もゆかぬのに元服姿は見おとりするかと案じていたが」と、成人した光源氏の立派さを婉曲的に讃える。すると左大臣は帝に、「かえっていっそうお美しさをましたように思われます」と、光源氏の高貴を讃え、臣下としての礼をもつくし、共感する場面がある。韓国語訳をみると、桐壺帝の言葉を「아직 연소한 연세여서 관례의상이 어울리지 않을까 염려했으나」と訳しているが、傍線の「ヨンソハン ヨンセ(연소한 연세)」は漢字言葉で、「年少な御年齢」、つまり「若年」の意味になる。特に「御年齢」を修飾する「ヨンソハン(年少な)」は漢字読みの硬い表現で、口語体では死語にも近い。「ヨンセ(御年齢)」は古

めかしくも丁寧な言葉で、まるで桐壺帝が光源氏に敬語を使うような誤解を招き、読者は左大臣の言葉として誤読しかねない。しかも、左大臣の「思われます」を「ガッデグンヨ (갈더군요)」、つまり「ようですよ」と曖昧な口調に翻訳することで、桐壺帝と左大臣、そして光源氏の関係に混乱をもたらし、読者の誤読を招いてしまう。

結局、長い間自分の才能のなさを口実に『源氏物語』韓国語訳を避けてきた私なりの責任を痛感してしまっわけであるが、とうとう真摯に韓国語訳に立ち向かう決心をした。翻訳への思い、それが私の一年間の日文研での滞在からの最大の収穫でもある。自分の苦い思いを噛み締めながら、読者が楽しめる『源氏物語』韓国語訳をしよう。

(国立韓国放送大学教授)